

明治記念大磯邸園の履歴

事務局案であり、今後、議論を深めていくための資料です。

目次

1. 大磯町の歴史と明治記念大磯邸園

2. 邸園の所有・建造物の変遷

3. 邸園の使い方

4. 小余綾(こゆるぎ)の磯の風景(明治～大正期)

5. 明治記念大磯邸園における交流

1. 大磯町の歴史と明治記念大磯邸園

● 鎌倉時代 宿場町のはじまり

鎌倉時代に鎌倉と京都間の往来が頻繁になり、東国の交通は大いに発達した。現在も各地に鎌倉へと続く、鎌倉街道（鎌倉道）という呼び名の道が残っている。この頃から大磯町は宿場として機能しはじめる。

● 江戸時代 東海道の宿場町として発展

江戸時代の宿駅制度により、大磯町は宿場町としてさらに栄えた。慶長9年（1603）に一里塚が設けられ、街道沿いにはマツやエノキが植えられた。約400年前に植えられた明治記念大磯邸園前の松並木も貴重な文化遺産である。



● 明治18年（1885） 日本初の海水浴場「大磯海水浴場」

海水浴は医療行為として始まり、保養地・避暑地として別荘の建設が増加した。

● 明治20年（1887） 大磯駅開業、別荘地として急速に発展

駅開業に加えて、伊藤博文の居住により全国的に別荘地としての大磯が有名になった。明治22年（1889）に21軒であった別荘は明治40年（1907）には108軒にも増加した。

明治政界の奥座敷・大磯 明治政財界の要人が集う

歴代の内閣総理大臣だけでも8名が大磯に別荘を持っていた。

【大磯に別荘を持った宰相】

伊藤博文、山県有朋、大隈重信、西園寺公望、寺内正毅、原敬、加藤高明、吉田茂

→ **明治記念大磯邸園**
 （立憲政治の確立等に
 貢献した人物の建物群）

平成30年（2018）現在

医療行為から始まった海水浴はレジャーとなり、現在では町内の観光施設の利用のうち約7割を大磯海水浴場が占めている。（平成29年）

明治政界の奥座敷としてにぎわった別荘地の頃を偲ぶ邸宅は、旧滄浪閣を含む数件に限られる。

目次

1. 大磯町の歴史と明治記念大磯邸園

2. 邸園の所有・建造物の変遷

3. 邸園の使い方

4. 小余綾(こゆるぎ)の磯の風景(明治～大正期)

5. 明治記念大磯邸園における交流

「2. 邸園の所有・建造物の変遷」の文献資料の収集にあたっては水沼委員にご助言、ご協力いただき作成致しました。

2. 邸園の所有・建造物の変遷 ①

旧伊藤博文邸(滄浪閣)の所有

● 伊藤博文 (1896~1921)

明治29年(1896) 5月 大磯町西小磯に「滄浪閣」完成
和風平屋で茅葺の居宅とレンガ造の二階建瓦葺の洋館を建築
博文死後、伊藤夫人(梅子)の住居となる



「大磯町郷土資料館所蔵」

● 李王家 (1921~1946)

伊藤博文の養子である博邦から李王家に譲渡され、**李王家別邸**となる
関東大震災で滄浪閣倒壊

昭和元年(1926) 二階建の洋館を建築 → 「滄浪閣旧材を一部利用しながら再建」と言われている

米軍(GHQ)に接収

臣籍降下により財産処分

● 楢橋渡 (1946~1951)

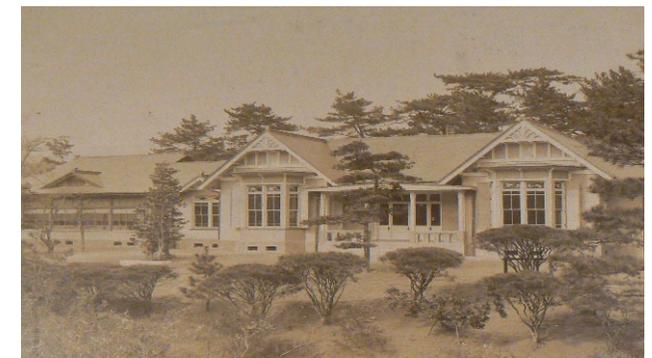
李王家から当時法制局長官であった楢橋に申し入れがあったことから所有

● 西武鉄道(株) (1951~2008)

宿泊施設(大磯プリンスホテル別館)として開業
(バンケット、チャペル等を増設)

● 福祉系事業者 (2008~)

大磯町有形文化財に指定(建造物附 杉戸絵4枚)



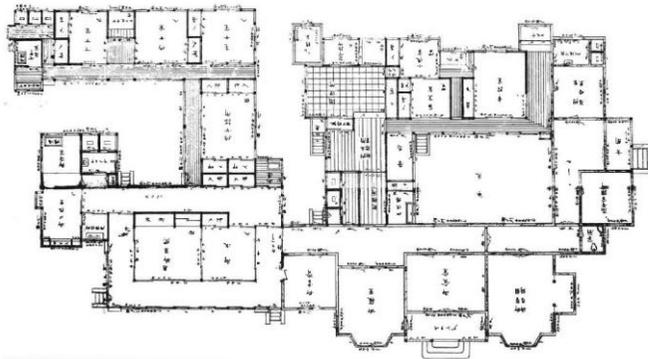
旧材を使い再建されて間もない頃と思われる写真
「大磯町郷土資料館所蔵」

平成30年(2018) 利活用されていない

○ 不明点

- ・滄浪閣旧材の利用箇所
- ・レストラン部分が建てられた時期

2. 邸園の所有・建造物の変遷 ①



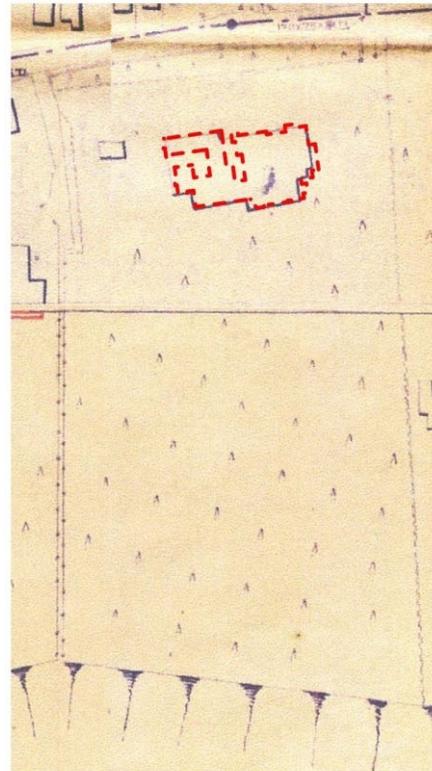
No.03 李垠大磯別邸 平面図

出典：『大磯のすまい』（平成4年）大磯町郷土資料館
 ※東京都立中央図書館木子文庫からの抜粋
 昭和1～20年の頃と推定される



No.04 航空写真（昭和21年）

出典：国土地理院



No.05 昭和5-8年頃に作成された測量図

出典：昭和8年 旧管網図①（神奈川県）
 大磯町立図書館



No.06 航空写真（昭和21年）

出典：国土地理院

[凡 例] No.03の建物外周線

- 大正12年、関東大震災により前身建物は被災、昭和元年に建て直される
- 航空写真から、再建後、米軍に接收されるまで、大きな改変はなかったと推定される

年表	李王家 別邸		楢橋渡 所有	
	1	滄浪閣の旧材を利用しながら再建	GHQへ接收	政治家の楢橋渡へ売却
		20	21	26
昭和				

2. 邸園の所有・建造物の変遷 ①

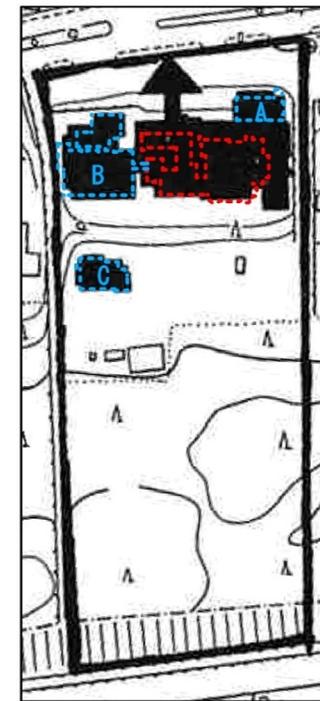


No.07 航空写真 (昭和27年)
出典：国土地理院



No.08 滄浪閣実測図 (昭和33年)

出典：株式会社プリンスホテル
※実測図の他に昭和40年の追記あり



No.09 配置図
出典：『大磯のすまい』 (平成4年)
大磯町郷土資料館



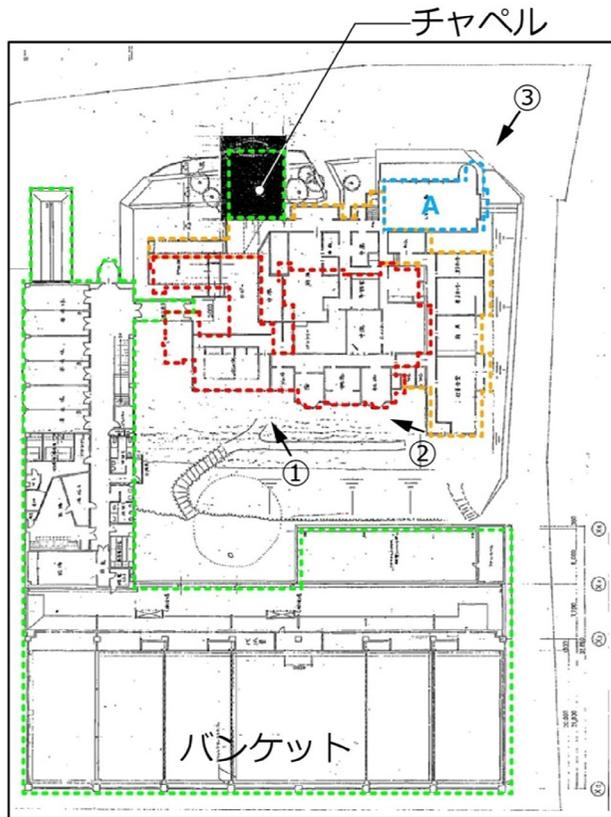
No.10 古写真
出典：観光パンフレット大磯
※撮影年代は不明
(昭和26年以降と推定)
大磯町郷土資料館

[凡 例] No.03の建物外周線 No.08の建物外周線

- 昭和21～27年に が、昭和27～33年に が、昭和33～37年に が増築される
 、 は昭和63年の航空写真まで確認される。 は現在まで残る
- は李王家の頃からあまり変化がないが、配置図では に建物が描かれる

西武鉄道(株)所有 大磯プリンスホテル別館		
年 表	西武鉄道(株)が購入	増築
	26	27～30
昭和		平成

2. 邸園の所有・建造物の変遷 ①



No.09 チャペル増築工事図面(平成4-7年頃)
出典：株式会社プリンスホテル

[凡 例] (No.) → 写真撮影方向

- No.03平面図の建物外周線
- No.08平面図の建物外周線
- No.09平面図の建物外周線



No.10 航空写真 (平成19年)
出典：国土地理院



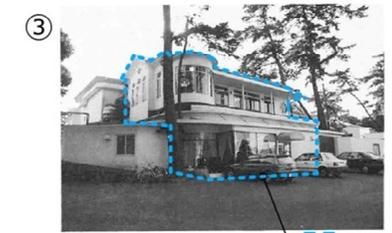
No.11 配置図(平成30年)
(一財)公共用地補償機構作成



① 李王家の頃から変わらない



② 李王家の頃から変わらない



③ No.12 写真
出典：『大磯のすまい』(平成4年)
大磯町郷土資料館

A か?

- 平成4～7年に が増築される。それに伴い、 、 は撤去される
- (No.8測量図 昭和33年に記載あり)の増築時期は不明(確認中)
- の南側は李王家の頃からあまり変化はないが、西、北、東側は改修されている
- 大磯町有形文化財の指定範囲は と A

年表	西武鉄道(株)所有 大磯プリンスホテル別館		民間事業者 所有	
	バンケットホール増築	チャペル増築	宿泊施設の営業終了	大磯町有形文化財に登録
4	7	19	20	30
平成				

2. 邸園の所有・建造物の変遷 ②

旧西園寺公望邸跡(旧池田成彬邸)の所有

● 西園寺公望 (1899~1917)

明治32年(1899)伊藤の勧めもあり、滄浪閣の西隣に茅葺の「隣荘」を建築
敷地はおよそ4,400坪

伊藤が死去した後は、興津「坐漁荘」に別荘を移し、池田成彬に売却

● 池田成彬 (1917~1952)

関東大震災後 本邸と大磯別邸等の設計を曾禰中條建築事務所の中條精一郎に依頼

昭和7年(1932) 大磯に地下1階、地上2階(屋根裏部屋付)の洋館を建築

三井銀行を退職後、しばらくは大磯の自宅で静養の日々を過ごす(68歳)

昭和25年(1950)10月 胃潰瘍のため大磯町の自宅で死去 享年83歳

● 帝国銀行(三井銀行) (1952~1954)

帝国銀行に所有が移る(帝国銀行は昭和29年(1954)1月に三井銀行に行名復帰)

● 三井銀行 (1954~)

三井銀行 役員寮として使用



「隣荘」
大磯町郷土資料館所蔵



「池田氏大磯別邸」外観
曾禰達蔵・中條精一郎建築事務所作品集

平成30年(2018) 利活用されていない

役員寮時代の利用(増改築の有無)が分からないものの、
現在の建造物は池田成彬が建築した本邸の可能性が高い。

2. 邸園の所有・建造物の変遷 ②

旧西園寺公望邸跡(旧池田成彬邸)の建造物



No.01 西園寺公望邸（隣荘）

出典：『大磯のすまい』（平成4年）大磯町郷土資料館
 ※撮影年代は不明（昭和7年以前と推定）



No.02 文質会（昭和3年・大磯にて）

出典：『池田成彬伝』（昭和37年）池田成彬伝記刊行会 編 慶応通信
 ※背面の写真が隣荘かは不確定

- 西園寺公望別邸（隣荘）の敷地範囲、建物配置は不明
- 西園寺公望別邸（隣荘）の規模、間取り、改修履歴等は不明

年表	西園寺公望 別邸	池田成彬 別邸 → 本邸		
		売却	曾禰中條設計事務所へ大磯別邸の設計依頼	
32		6	12	7
	明治	大正		昭和

2. 邸園の所有・建造物の変遷 ②



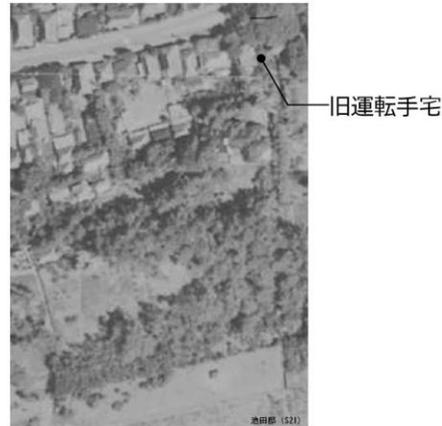
No.04 測量図 (昭和5~8年)
出典：昭和8年 旧管網図① (神奈川県)
大磯町立図書館



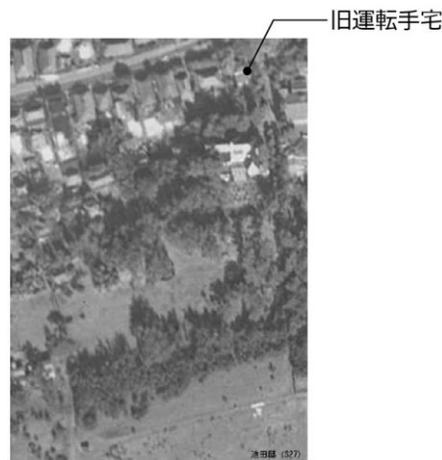
上 No.05 庭園側



下 No.06 客間
出典：『曾禰達蔵・中條精一郎
建築事務所作品集』
(昭和14年)



No.07 航空写真 (昭和21年)
出典：国土地理院



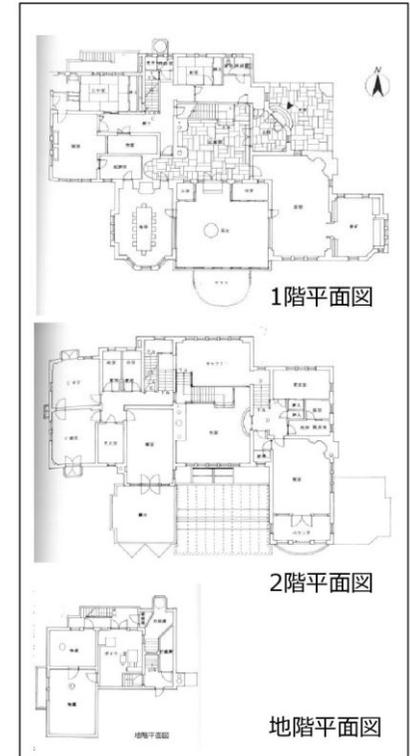
No.08 航空写真 (昭和27年)
出典：国土地理院



No.09 配置図
出典：『大磯のすまい』 (平成4年)
大磯町郷土資料館



No.10 航空写真
(平成19年)
出典：国土地理院



No.11 旧池田成彬別邸
各階平面図
(昭和62~平成元年)
出典：『大磯のすまい』 (平成4年)
大磯町郷土資料館

○昭和7年に新築されてから大きな
改変は見られない

年表	池田成彬 別邸 → 本邸	帝国銀行	三井銀行 役員寮
	新築		
	7	27	29
	昭和		平成

2. 邸園の所有・建造物の変遷 ③

旧大隈重信邸の所有

- **大隈重信（1897～1901）**
 明治30年（1897） 大磯に別邸を購入
- **古河家（1901～1948）**
 明治34年（1901） 古河市兵衛が購入
- **古河電気工業(株)（1948～2018）**
 昭和23年（1948） 古河電気工業株式会社に所有移転
 迎賓館「大磯荘」として利用

現在の敷地は約8,000坪ほどであるが、隣の大磯中学校に譲る前は12,000～13,000坪あった。

大磯町文化財報告書「大磯の住まい第1編-宿・町屋・別荘建築編-」（1992.3）大磯町教育委員会



大磯別荘の侯爵

がふけんせいごじゅうねんし

出典：「畫譜憲政五十年史」(1942)画譜憲政五十年史刊行会 編. 大日本皇道奉賛会

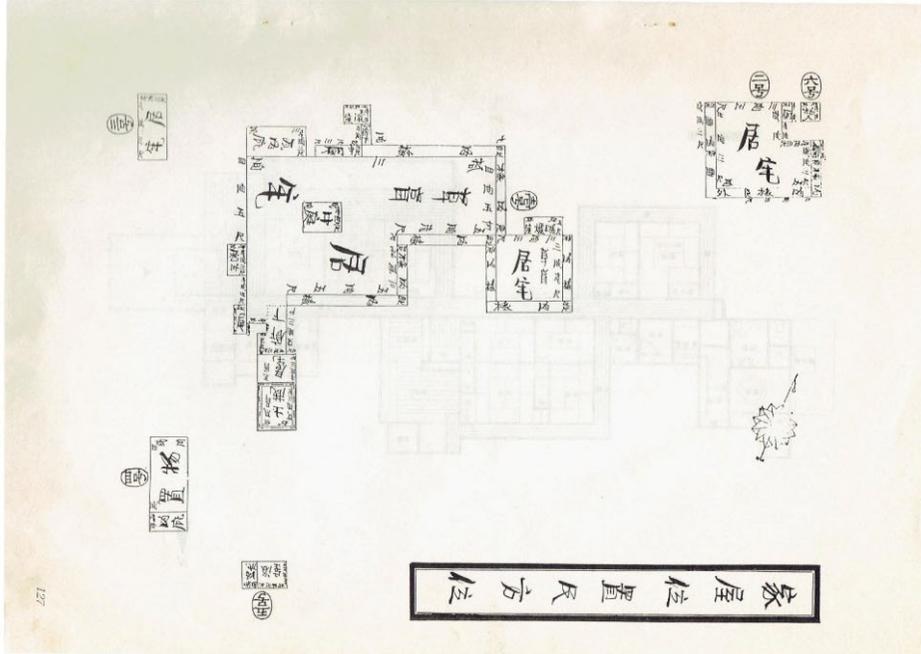
平成30年（2018）9月 邸宅（建造物）は、国の管理となる。

○ 不明点

- ・ 大隈重信が購入した当時の敷地区域

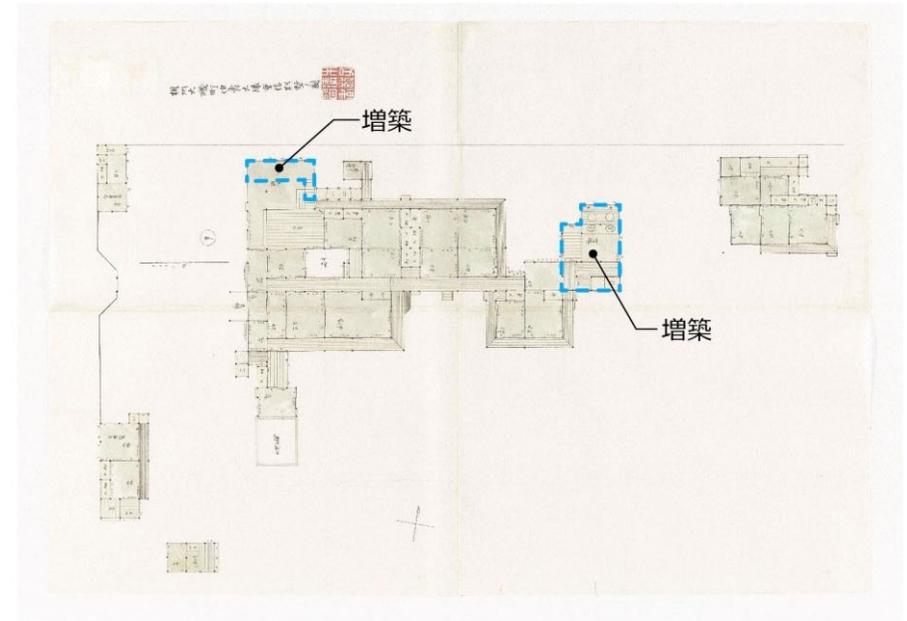
2. 邸園の所有・建造物の変遷 ③

旧大隈重信邸の建造物



No.01 大隈重信別邸「家屋図」

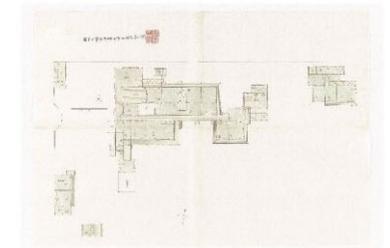
出典：『大磯のすまい』（平成4年）大磯町郷土資料館
 ※明治30年代初頭に作成されたと考えられる台帳に記載される



No.02 相州大磯町伯爵大隈重信別墅ノ図

※押印より木子清敬（弘化元年12月24日-明治40年6月25日）の手によるもの
 絵図は明治30～34年に作成
 東京都立中央図書館木子文庫蔵

- 台帳によると、吉川慎一郎所有の建築を大隈重信が取得している
 ※台帳現時点未確認。建築、所有の履歴不明
- 大隈重信の時代に台所と浴室を増築している
- 附属屋は変わらない



No.02 原図

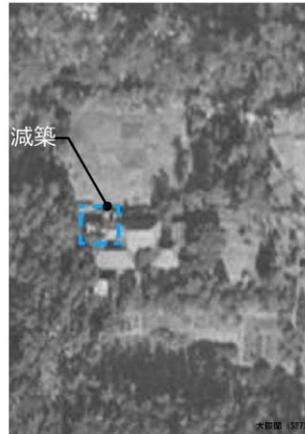
年表	吉川慎一郎 所有	大隈重信 別邸	古河 別邸	5
	建築		改築(増築)	
		30	30~34	34
	明治		大正	
			昭和	

2. 邸園の所有・建造物の変遷 ③



No.03 航空写真
(昭和21年)

出典：国土地理院



No.04 航空写真
(昭和27年)

出典：国土地理院



No.05 航空写真
(昭和39年)

出典：国土地理院



① 玄関

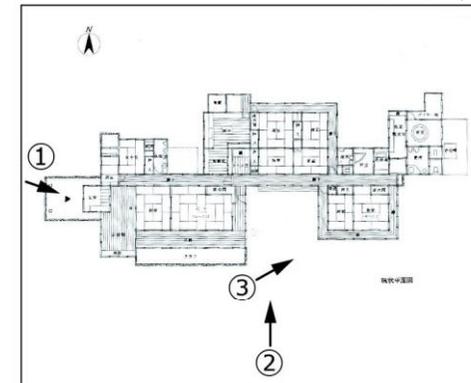
No.06 写真 出典：『大磯のすまい』（平成4年）
大磯町郷土資料館



② 海岸より見た全景



③ 神代の間の外観



No.07 現状平面図
(昭和62～平成元年)

出典：『大磯のすまい』（平成4年）大磯町郷土資料館

[凡例]
No. → 写真撮影方向

- 昭和5年に水廻りの改修（減築）が行われる
- 昭和21～27年に水廻りの改修（減築）が行われる
- 昭和27～39年に土蔵が減築される
※現在、建物南西に蔵が残る。
当時の蔵については今後の調査課題
- 昭和27～39年に屋根形状が変わる（寄棟→入母屋・切妻へ）
茅葺屋根から金属板葺き屋根に変更したと推定される
- 縁側等改修されるが、南主室の大きな改変は見られない

年表	古河 別邸	古河電気工業(株) 所有	
	改築(減築)	改築(減築)・屋根形状の変更	
	5	21～39	23
	昭和		平成

2. 邸園の所有・建造物の変遷 ④

旧陸奥宗光邸の所有

- **陸奥宗光（1894～1904）**

明治27年（1894）12月 大磯に別荘を建築

宗光死後、陸奥夫人（亮子）が相続

長男廣吉、次男古河潤吉に所有が移転

- **古河家（1904～1956）**

明治37年（1904）12月 古河潤吉が所有

潤吉死去により古河虎之助が所有

原六郎氏、赤星鉄馬氏の土地を買増す

関東大震災で一部（旧東館別邸）大破 → 「改築されて原型を残す様になった」と言われている

改築後の建物は太田晦巖(1879～1946)により「聴漁荘」と名付けられた

一方、取り払って保存しておいた旧建物（材）は、昭和4年に足尾銅山の柏木平へ移築（豊潤洞→現状倒壊）

- **古河電気工業(株)（1956～2018）**

昭和31年（1956） 古河電気工業株式会社に所有移転

迎賓館「大磯荘」として利用

平成30年（2018）9月 邸宅（建造物）は、国の管理となる。



がふけんせいごじゅうねんし
出典：「畫譜憲政五十年史」(1942)画譜憲政五十年史刊行会 編. 大日本皇道奉賛会

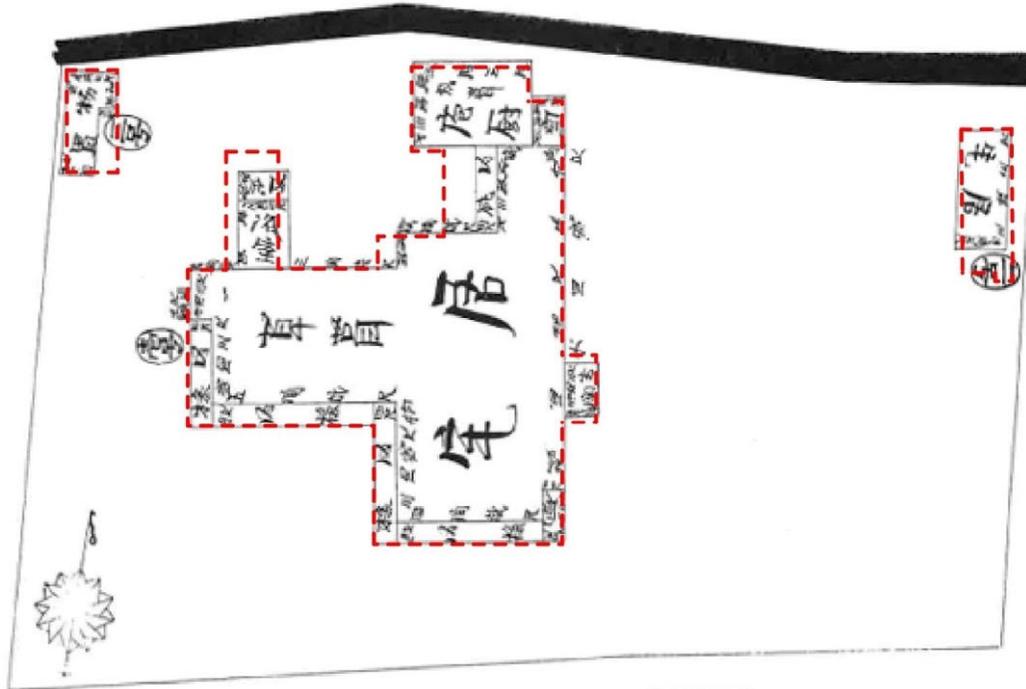
○ 不明点

現在の池泉回遊式庭園の作庭年代が不明。

→ 大隈別邸と同じく、敷地の変遷をとらえる必要がある。

2. 邸園の所有・建造物の変遷 ④

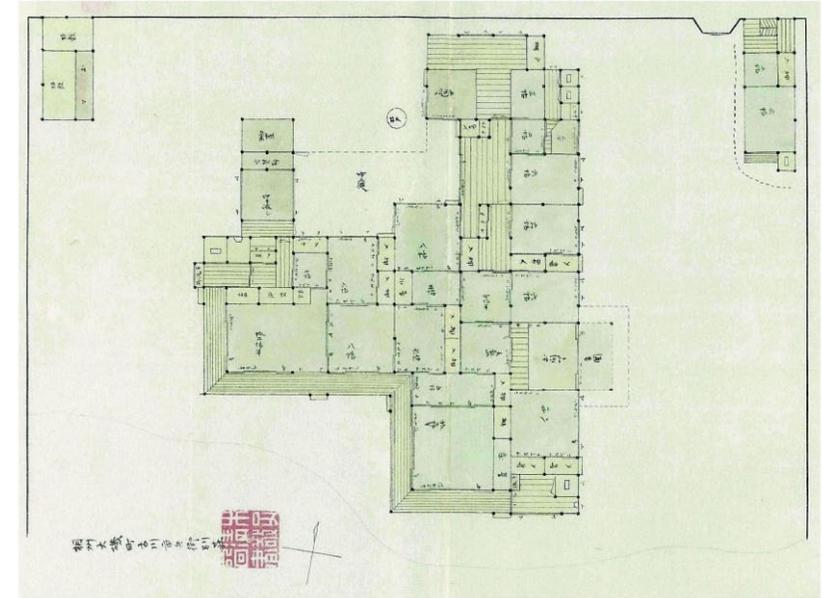
旧陸奥宗光邸の建造物



No.01 陸奥宗光別邸「家屋図」 [凡 例]  No.02の建物外周線を示す

出典：『大磯のすまい』（平成4年）大磯町郷土資料館

※明治30年代初頭に作成されたと考えられる台帳に記載される



No.02 相州大磯町古河市兵衛別荘

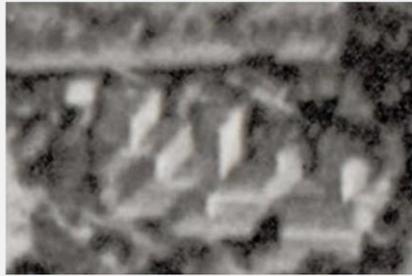
※押印より木子清敬（弘化元年12月24日-明治40年6月25日）の手によるもの
絵図は明治40年以前に作成

東京都立中央図書館木子文庫蔵

- 当時の敷地範囲、建物配置は不明
- 関東大震災までは大きな改変はなかったものと推定される

年表	陸奥宗光 別邸	陸奥 別邸	古河 別邸	関東大震災で一部大破	
	建築				
	27	30	37	12	13
	明治			大正	

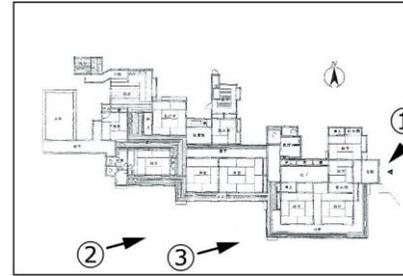
2. 邸園の所有・建造物の変遷 ④



No.03 航空写真 (昭和21年)
出典：国土地理院



No.04 航空写真 (昭和27年)
出典：国土地理院



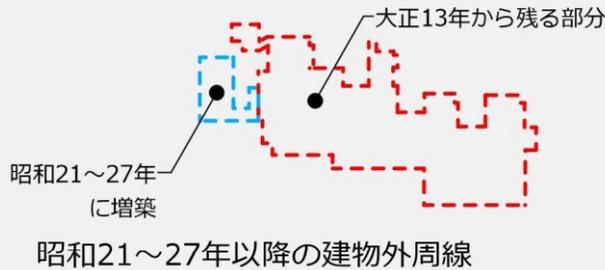
No.05 現状平面図
(昭和62~平成元年)
出典：『大磯のすまい』 (平成4年)



No.06 航空写真 (平成19年)
出典：国土地理院



建築後の建物外周線



昭和21~27年
に増築

昭和21~27年以降の建物外周線

大正13年から残る部分



① 玄関



② 奥が玄関へ付く客座敷



③ 玄関南の客座敷外観

- 大正12年、関東大震災により前身建物は倒壊
- 翌13年に建原型の一部を残すように改築したといわれている
- 昭和21~27年に蔵を増築し、以後大きな改変は見られない
- 旧管理人宅等の現附属屋は昭和36~39年に建てられた可能性が高い。ただし、昭和27年には現附属屋の前身建物が見られる

[凡 例]

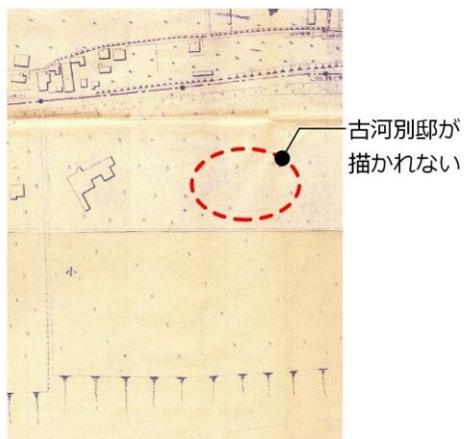
(No.) → 写真撮影方向

No.07 写真

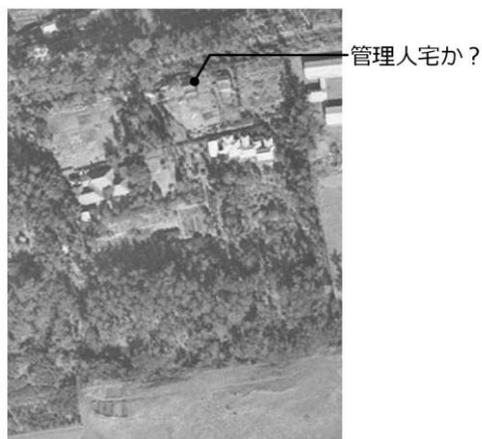
出典：『大磯のすまい』 (平成4年)
大磯町郷土資料館

年 表	古河 別邸		古河電気工業(株) 所有	
	建原型の一部を残すように改築		蔵を増築	
	13	21~27	31	
	大正	昭和	平成	

旧大隈重信邸及び旧陸奥宗光邸の敷地配置



No.01 測量図 (昭和5~8年)
出典：昭和8年 旧管網図① (神奈川県)
大磯町立図書館



No.03 航空写真 (昭和27年)
出典：国土地理院



No.05 航空写真 (平成19年)
出典：国土地理院



No.02 航空写真 (昭和21年)
出典：国土地理院



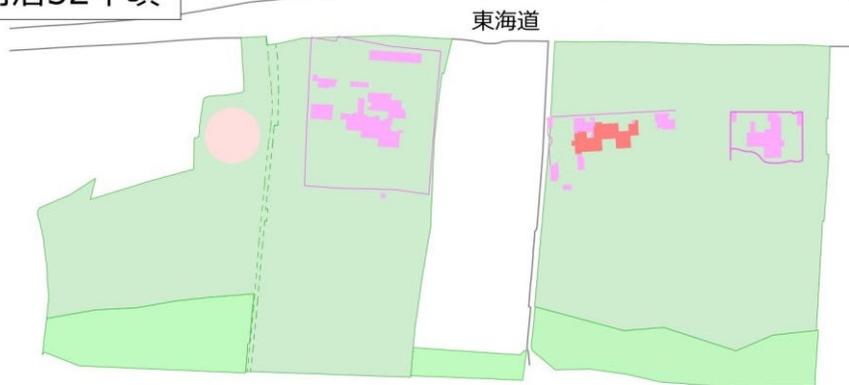
No.04 配置図
出典：『大磯のすまい』 (平成4年)
大磯町郷土資料館

- 昭和5~8年の測量図に古河別邸が描かれていない
- 昭和初期以降、建物配置に大きな変化は見られない

旧大隈重信邸	古川慎一郎	大隈重信 別邸	古河 別邸	古河電気工業(株) 所有	
旧陸奥宗光邸	陸奥宗光 別邸	古河 別邸			古河電気工業(株) 所有
年表	27	30	34	23	31
	明治		大正		昭和
					平成

明治記念大磯邸園全体の敷地の変遷

明治32年頃



西園寺公望 別邸

[旧西園寺公望邸跡(池田成彬邸)]

大隈重信 別邸

[旧大隈重信邸]

伊藤博文 本邸

[旧伊藤博文邸(滄浪閣)]

陸奥 別邸

[旧陸奥宗光邸]

昭和初期(震災後)



池田成彬 別邸→本邸

[旧西園寺公望邸跡(池田成彬邸)]

古河 別邸

[旧大隈重信邸]

[旧陸奥宗光邸]

李王家 別邸

[旧伊藤博文邸(滄浪閣)]

[凡 例]

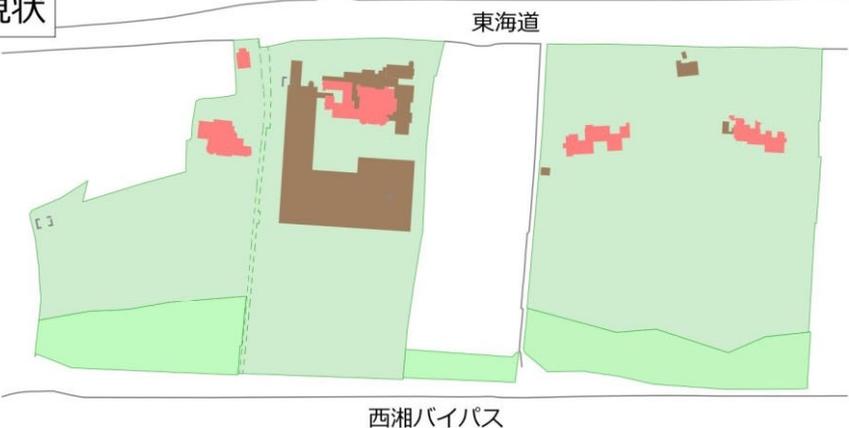
前身建物

撤去建物

現存建物

増築部分

現状



民間事業者

[旧西園寺公望邸跡(池田成彬邸)]

民間事業者

[旧大隈重信邸]

民間事業者

[旧伊藤博文邸(滄浪閣)]

[旧陸奥宗光邸]

- 明治期～昭和初期の各邸園の敷地範囲、境界等不明
- 明治期の旧大隈重信邸以外の敷地、建物配置等は不明
- 明治期の建物が残るのは旧大隈重信邸のみ
- 旧伊藤博文邸（滄浪閣）、旧陸奥宗光邸は大正12年の関東大震災を機に新しく建て直される
- 旧西園寺公望邸跡（池田成彬邸）は関東大震災後に設計依頼がなされ、昭和7年に洋館が建築される
- 旧伊藤博文邸（滄浪閣）は李王家別邸の建物が残っている可能性がある
- 附属屋はほとんど残っていない
- 旧西園寺公望邸跡（池田成彬邸）の旧運転手宅は昭和初期のものである可能性が高い

目次

1. 大磯町の歴史と明治記念大磯邸園

2. 邸園の所有・建造物の変遷

3. 邸園の使い方

4. 小余綾(こゆるぎ)の磯の風景(明治～大正期)

5. 明治記念大磯邸園における交流

3. 邸園の使い方

旧伊藤博文邸（滄浪閣）

伊藤博文（1896～1921） 「本邸」

邸園前の浜や周辺を散策し、漁夫や小学生等を自宅へ招くなど、財界人だけでなく多くの人を訪れた。

- ・ 激務の合い間を見つけては頻りに散歩へ出かけ、商店に立ち寄り、作業中の農漁民に気軽に話しかけた。夜半に地曳網へ行くこともあった。※²
- ・ …前略・公私・内外の訪問客が充満し、特に晩年は多かつた。…中略…それでも伊藤は、快く引見して談話するのが普通であった。※¹
- ・ 伊藤は天皇や皇族から祝い酒を下賜されると、町の主な人々を「滄浪閣」に招いて、梅子夫人とともに接待した。この他、小磯のお祭りに、四斗樽の酒を地元民に振舞ったり、小磯の漁夫を邸前の松林に集め、酒樽を打ち抜いて与え、梅子夫人とともに漁夫たちの歌や踊りの中に入って歓談したりしたこともあった※¹

※¹ 「伊藤博文近代日本を創った男」（2009）伊藤之雄・講談社

※² 「滄浪閣の時代：伊藤博文没後100年記念展」（2009）大磯町郷土資料館



滄浪閣の庭

左手に日本館、正面に四賢堂と梅林を望む。一段低い園庭に様々な花が咲き乱れる。

さらに右手方向には松林が広がり、海辺へと続いている。

出典：「滄浪閣の時代：伊藤博文没後100年記念展」（2009.10）大磯町郷土資料館



子ども達とふれあう伊藤

大磯郷土資料館所蔵

3. 邸園の使い方

伊藤と大磯町との関わり

大磯のまちづくりに貢献

公共工事や子供たちへ寄付等を行い、大磯町のまちづくりに積極的に関りをもっていた。

- ・伊藤自ら大磯町役場に赴き、大磯のために協力を惜しまない旨を告げたと述べたという。その言葉通り、町では折に触れて様々な援助を仰ぎ、一方伊藤は、地元住民と積極的に関りを持った。^{※1}
- ・大磯小学校移転の際、伊藤は寄付芳名簿の筆頭に500円（現在の約800万円）を記入し、自ら大磯在住の名士を訪れ、寄付金を勧誘した。^{※2}
- ・大磯駅から「滄浪閣」のある海岸の小磯に通じる道は、狭くて不便であったが、伊藤の尽力で広い道が造られた。^{※1} 統監時代に新設したので、時の宮代新太郎町長が官名をとって「統監道」と命名した。^{※3}
- ・10銭（現在の約1500円）ずつ入った郵便貯金通帳を、大磯小学校の全校児童のために作って、小学校に持ってきて贈った。その後も、自分の祝いや記念すべきことがあると、自ら贈って寄付したことが何度もあったという。大磯小学校の生徒が「滄浪閣」を訪れる交流もあった。^{※2}

- ※1 「滄浪閣の時代：伊藤博文没後100年記念展」（2009）大磯町郷土資料館
- ※2 「伊藤博文近代日本を創った男」（2009）伊藤之雄・講談社
- ※3 「大磯町史8別編民族」（2003.6）大磯町



滄浪閣前の東海道（明治後期）
東海道を西へ向けて撮影したもの。松並木敷に竹矢来が築かれている。

出典：「滄浪閣の時代：伊藤博文没後100年記念展」（2009.10）大磯町郷土資料館

3. 邸園の使い方

旧伊藤博文邸（滄浪閣）

李王家(李垠・方子夫妻)^{いうん まさこ}(1921～1946) 「別邸」

王公族の李王家の別邸として、李垠と伊藤、李王家夫妻の思い出の地として利用されていた。

- ・滄浪閣は韓国李王家李垠に譲渡され、大磯別邸として利用されるようになった。※1
- ・李王家では第二次世界大戦直後まで使用しており、地元では「李王さん」と呼ばれ、親しまれていた。※1
- ・皇族という特別な地位や特権が崩壊した以上は、…中略…大磯と今井浜にある別荘も、手放すことにしました。中でも大磯の滄浪閣は、その伊藤博文公が憲法の起草にあたられた由緒あるところですが、私にとっては娘時代の思い出も多く、絶ち難いをおぼえて、名残りもひとしおでした。※2（李王世子の李垠は皇族の梨本宮家の長女方子女王と結婚。翌年伊藤滄浪閣を譲り受ける。梨本宮家の別荘も大磯にあったことから、大磯の地への愛着が覗える）



西洋館の前にて（明治41年（1908）/伊勢田博司氏提供）
左端が伊藤、その右に着席しているのが李垠。

大磯郷土資料館所蔵

※1「滄浪閣の時代：伊藤博文没後100年記念展」（2009）大磯町郷土資料館
※2「流れのまゝに：李方子自叙伝写真集」（1978）李方子 明恵会

3. 邸園の使い方

旧伊藤博文邸（滄浪閣）

榎橋 渡（1946～1951）「別邸」

戦後の新憲法の構想の場、隠居の住まいとして利用されていた。

- ・昭和20年の末に、李王家から当時法制局長官であった榎橋にこの建物を使用してはどうかという申し入れがあった。伊藤公が明治憲法を構想したゆかりの邸宅であるから、新しい憲法を構想するのにちょうど恰好ではないかというので、…後略…。※
- ・この敷地内に明治の元勳、岩倉具視、三条実美、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文の画像を祀った「五賢堂」という祠があり追放中の榎橋がここで坐禅を組んで無の境地に遊んだことは彼のさまざまな文中にも書かれている。…中略…心の安住をこの五賢堂の中に見出そうとして、毎朝板張りの上に坐り無の世界への旅を試みているが、雑念が湧き、救われるべきときもない気持がする。※
- ・滄浪閣での榎橋の生活は、広い邸内の松林をそぞろ歩きなどするだけの、文字どおり隠棲の形であったが、それでも持ち前の社交性は失われることなく、折りにふれては誰彼となく交流した。なかでも隣接の池田成彬邸へはよく訪問した。…中略…（池田成彬は、）裏木戸から自由に出入りできる滄浪閣へも遊びにきた。※
- ・戦時中に入り込んだ軍隊が、百数十本の老松を伐り倒した。陣地構築のために伏り倒した木は、結局うやむやに拋棄された。大磯へ引籠ってから、この跡の砂地を開墾してさつま芋三千本ばかり植えた。

※ 「榎橋渡傳」（1982）榎橋渡伝編集委員会、榎橋渡伝出版会



四賢堂(五賢堂)

明治末期／伊勢田博司氏提供

伊藤博文によって明治32年(1899)に建てられ、皇太子(後の大正天皇)による四賢堂の扁額が掲げられていた。

当初、木戸孝允、大久保利通、岩倉具視、三条実美の4名が祀られた四賢堂だったが、伊藤没後に梅子夫人が伊藤の霊を堂中に分祀し、五賢堂となった。

榎橋と同じように、伊藤博文も毎朝榎を供え、中の円座にすわって考え事をする事が多かったという。

写真は添え書きに五賢堂とあるため、伊藤合祀後の撮影と思われる。

3. 邸園の使い方

旧西園寺公望邸跡（旧池田成彬邸）

西園寺公望（1898～1917） 「別邸」

伊藤や陸奥ら、親しい政治家との政策談義や社交の場として使われていた。

・西園寺は陸奥と伊藤の関係を密接にするように努めた。自分の家に伊藤が晩酌にくるから、（陸奥に）偶然のようによそおって来宅しないかという誘いまでしている。…中略…のちの**立憲政友会創立につながる政治的人脈**はこの頃から形成されつつあった。※1

池田成彬（1917～1951） 「別邸」 → 「本邸」

こだわりを持って作った別邸を晩年は自宅とした。政財界の相談役の住まいとして、吉田茂などが多くの人を訪れた。

- ・食堂の前にある**六角型の朝餐室一温室**…中略…『自分はアメリカで某家に寄宿をしたが、そのとき、庭に朝餐室があって、そこで朝飯を食べた。いかにもうらやましかった。時を得たならば、ぜひこれを造りたいと思っ^{ちようさんしつ}ていが、今度それが実現したのだ』…後略。※2
- ・池田と吉田内閣との関係については、池田の方が、なにくれとなく忠告を与える立場にあった…中略…池田邸の玄関で、主人が吉田に向かって…後略。※2
- ・戦犯の謹慎中でありながら**日本人はもとより遠くアメリカ、イギリスからの訪問客で門前市をなしてはいた**…後略※3
- ・池田成彬は晩年大磯町の別荘を自宅とし、胃潰瘍のため死去。※2



昭和24年春・大磯にて〔撮影・土門拳氏〕（中央は艶夫人，右は小汀利得氏）
出典：「池田成彬伝」（1962）池田成彬伝記刊行会 編 慶応通信

- ※1「西園寺公望最後の元老」（2003）岩井忠熊・岩波新書
- ※2「池田成彬伝」（1962）池田成彬伝記刊行会 編 慶応通信
- ※3「私の人生観」（1951）池田成彬・文芸春秋新社



「池田氏大磯別邸」客間

出典：「曾禰達蔵・中條精一郎建築事務所作品集」（1939）中條建築事務所 編、中條建築事務所

3. 邸園の使い方

旧大隈重信邸

大隈重信(1897~1901) 「別邸」

総理大臣経験の前年から大学設立前年までの**短期間、政治的な応接・社交の場として使われていた。**

- ・伊藤が大磯に本邸を構えた年に別荘を建設※1
- ・**16畳の「富士の間」と隣の10畳間をつなげて、よく大宴会を開いた。**※1
- ・東側の居宅は神代杉をふんだんに使っていることから神代の間と呼ばれ、大隈の書斎となっていた。神代の間にはテロで片足をなくした大隈の体に配慮して、暖炉が備えられている。※2

※ 明治31(1898)年に内閣総理大臣になった3年後の明治34(1901)年に大磯の別荘を手放し、翌年東京専門学校を早稲田大学と改称し、早稲田大学開校式を行っている。※2

古河家(古河市兵衛~)(1901~1948) 「別邸」

病気療養の場、休暇を楽しむ保養の場として使われていた。

- ・市兵衛大病を得て大磯邸、熱海等に**転地療養**。※3

※ 明治36年に古河市兵衛から潤吉(陸奥の次男、市兵衛の養子)に家督が譲られ、翌年陸奥別邸を潤吉が所有したことから、両邸宅は古河別邸として利用される。

大隈重信と伊藤公に於ける談話



がふけんせいごじゅうねんし

大磯滄浪閣における伊藤公と大隈重信侯

**明治37年(1904)以降、土地の買い増しの
変遷を経て、旧陸奥邸とともに古河別邸として、
一つの敷地として利用されるようになる。**

※1「元勳・財閥の邸宅」JTBキャンブックス文学歴史26(2007)

鈴木 博之,和田 久土.JTBキャンブックス

※2「大隈重信自叙伝」(2018)岡本厚・岩波書店

※3「大磯荘」古河電気工業株式会社パンフレット

3. 邸園の使い方

旧陸奥宗光邸

陸奥宗光(1894~1897) 「別邸」

病気療養、政策談義や回顧録を執筆して過ごし、時に親しい政治家との交流の場として使われていた。

- ・ 病気療養を目的に大磯に別邸を建築。部屋に好きな朝顔の鉢植を所せましと並べ寝ていても、伊藤を始め政客の往来が絶えなかった。※1
- ・ 日清戦争(1894~95年)や、露・独・仏の三国干渉などを回顧した蹇蹇(けんけん)録」を口述筆記で仕上げた。※1

陸奥家(亮子夫人、廣吉)(1897~1904) 「別邸」

古河家(古河潤吉~)(1904~1956) 「別邸」

病気療養を中心とした静養の場、休暇を楽しむ保養の場として使われていた。

- ・ 明治36年夏には終に業務と絶って大磯別邸に^{てんりょう}轉療した。翌37年4月大磯より箱根に転地し、幾何もして又大磯に帰臥し、7月7日に再び箱根に赴いて9月10日まで滞在した。※3
- ・ 市兵衛、潤吉死後、古河虎之助が古河家の家督を相続。古河家別邸として管理。※2
- ・ 虎之助は、よく大磯の別邸にて海で体を鍛えた。※4
- ・ 相撲好きだった虎之助は、明治41年、22歳のころから築地の本邸に土俵を造り若手の力士と共に稽古に励むなどし、大磯の別荘にも土俵をつくり、力士たちを引き連れて来ては相撲を楽しんでいた。※5



大磯別荘の土俵

明治39年秋、米国から帰国した虎之助は、大磯別荘の土俵で相撲に興じた。右から9人目が古河虎之助。

- ※1 「陸奥宗光」(1985) 中野武 関西図書出版
- ※2 「大磯荘」古河電気工業株式会社パンフレット
- ※3 「古河潤吉君傳」(1926) 五日会 編・五日會
- ※4 「神奈川県史 人物編」
- ※5 NHKエンタープライズ「明治記念大磯邸園 明治 150 年記念公開資料」

目次

1. 大磯町の歴史と明治記念大磯邸園

2. 邸園の所有・建造物の変遷

3. 邸園の使い方

4. 小余綾(こゆるぎ)の磯の風景(明治～大正期)

5. 明治記念大磯邸園における交流

4. 小余綾(こゆるぎ)の磯の風景(明治~大正期)

邸園前の松林と海岸(こゆるぎの磯) → 明るく開けた松林と、漁でにぎわう浜の風景

- ・海岸に近いところでは、海岸の松山にタキツケ用としてマツバカキに行った。松山へは自由に入ってもいいが木をとってはいけなかった。一年中かきに行ったが、特に秋から春先にかけて大風のあったときが良かった。秋は台風がきたとき、冬場は西の風が吹いたときには夜中に起き、カンテラをもって先を争って行ったという。**別荘の敷地内へかぎに行くこともあった**ようである。
 - ・大磯中学校の運動場は、昔は松林だった。秋ごろ風が吹くと、四時起きでわれ先にと松葉を取りに行った。**松葉を一年分集めた**。
 - ・**ハマが漁でにぎわっていたころの相模湾は、本当に魚が豊富**で、夜、大磯や須賀、小田原から沖釣りに出た船の灯りで沖合に町が出現したかのように見えたという。それが陸の発展とともに魚が獲れなくなっていった。この傾向は昭和30年ごろから顕著になり、西湘バイパスの開通とともに決定的となった。
- 「大磯町史8別編民族」(2003.6)大磯町・大磯町



松林で過ごす陸奥の様子
 左手前に座るのが宗光。隣が亮子夫人。ハンモックの上は山県有朋。
 出典:「古河潤吉君傳」(1926)五日会編・五日會



雪暮の富士 大磯八景
 絵はがき「大磯八景 富士の暮雪」(明治末期~大正初期)
 大磯郷土資料館所蔵

4. 小余綾(こゆるぎ)の磯の風景(明治~大正期)

明治から大正期の写真から、邸園の松林と海岸との間にそびえる高い丘や、漁や海水浴で賑わう海岸の様子など、伊藤が散歩した頃のこゆるぎの浜の景色がうかがえる。



現在の大磯町役場付近にあった砂丘は、ころばり山と呼ばれ、子ども達の遊び場だった。

絵はがき「(大磯圓會)小餘呂岐晴嵐」(明治40年9月13日消印)
大磯郷土資料館所蔵



海岸の砂山に立つ伊藤
明治40(1907)年頃/伊勢田博司提供



海岸を散策する伊藤
(右手前方の和服姿が伊藤)
明治40(1907)年頃/伊勢田博司提供



絵はがき「(大磯八景之内)海岸の富士」(大正1年8月4日消印)
大磯郷土資料館所蔵

出典:「滄浪閣の時代:伊藤博文没後100年記念展」(2009.10)大磯町郷土資料館

目次

1. 大磯町の歴史と明治記念大磯邸園

2. 邸園の所有・建造物の変遷

3. 邸園の使い方

4. 小余綾(こゆるぎ)の磯の風景(明治～大正期)

5. 明治記念大磯邸園における交流

5. 明治記念大磯邸園における交流

●邸宅を継承する人物のつながり

滄浪閣（伊藤博文別邸）の継承

- 伊藤博文の死後、初代韓国統監となった伊藤博文が韓国李王朝の皇太子李垕の日本留学に随行した等の関りから、懇意となった李王家に譲渡される。滄浪閣での伊藤家族と共に写る李垕の写真も複数見られ、親しい交流が伺える。
- 戦後は一時GHQに接収されたものの、李王家からの申し入れで当時法制局長官であった樫橋度が所有することになる。当時戦後の憲法構想に携わっていた樫橋は、大磯の景色と明治憲法ゆかりの伊藤博文邸が気に入り、申し入れを受けた。

西園寺公望別邸の継承

- 西園寺は伊藤博文の死後、隣荘を引き払う。その際、政界で最高の権威を持っていた西園寺が、信頼を寄せ、政界に引き出そうしていた池田成彬に隣荘購入の話を持ち掛けたことから、当時三井銀行の重役だった池田成彬が所有することとなった。

大隈重信別邸の継承

- 伊藤博文が大磯の滄浪閣を本邸とした年に別邸を購入。僅か4年で近隣の陸奥別邸と縁がある古河市兵衛に売却する。古河家の所有となって以降、陸奥邸と共に古河別邸として利用された。

陸奥宗光別邸の継承

- 陸奥死後、夫人から2人の息子（廣吉、潤吉）の所有となり、陸奥宗光の友人古河市兵衛の養子となった次男の潤吉が古河家の家督を相続した翌年、大磯の別邸を所有して以降、古河家の別邸として利用された。

5. 明治記念大磯邸園における交流

●交流の記録（伝記などの関連書籍から、明治記念大磯邸園と大磯に別邸を所有した人物の交流を整理）

伊藤博文を中心とした交流

- 大磯の気候や景観を気に入った伊藤に西小磯の土地を紹介したのが陸奥宗光だった。
- 伊藤と陸奥宗光や山県有朋は、別宅の隣人であることを生かし大磯で話し合いをしていた。また、原敬、西園寺公望など大磯在住の政治家をはじめ、伊藤がつくった政党（政友会）の政治家など多くの要人が滄浪閣を訪問した。また、大磯在住の岩崎弥之助、弥太郎や加藤高明とは家族ぐるみで親しく往来していたという記録もある。

陸奥宗光への訪問者

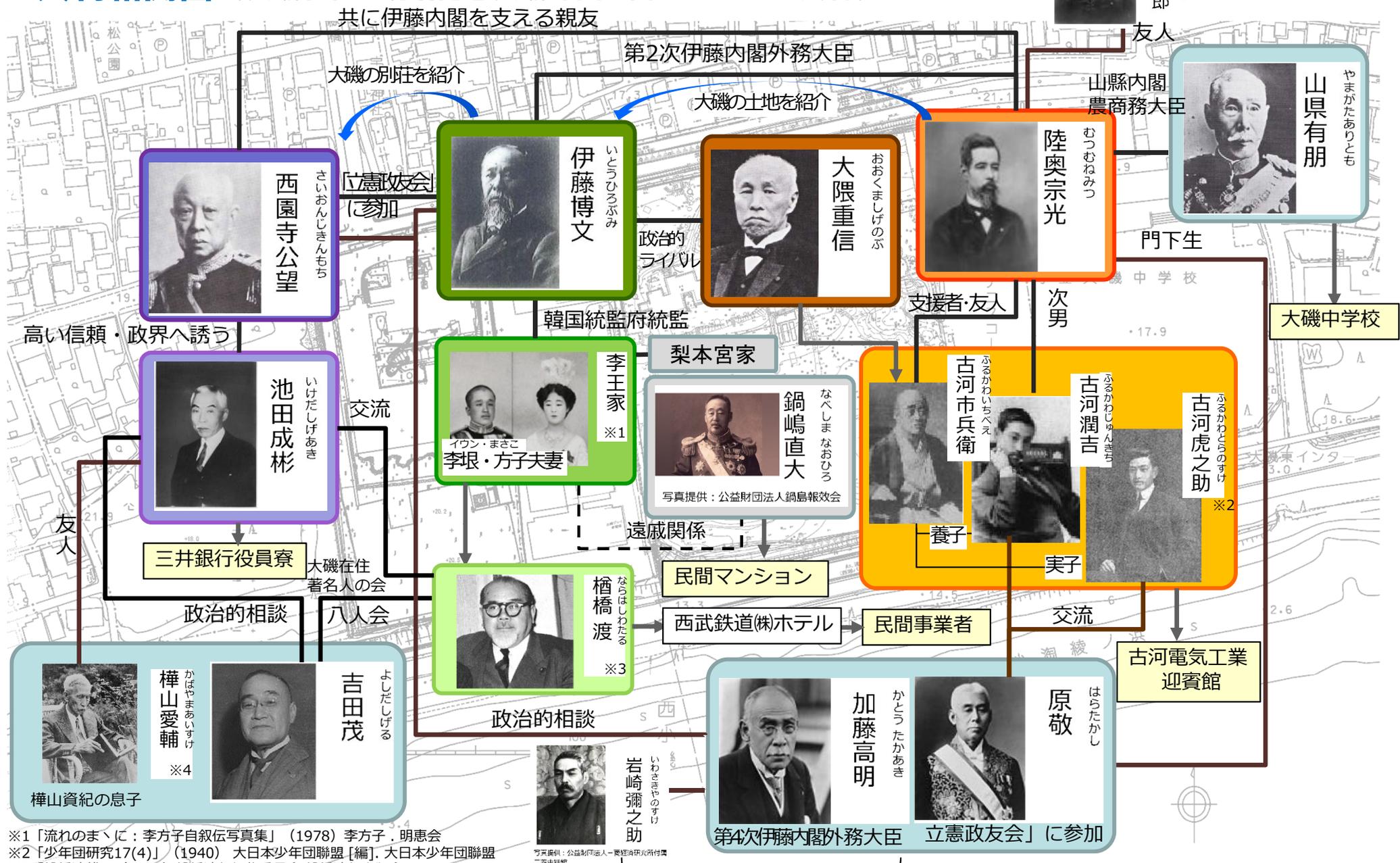
- 療養の最中、隣の山県有朋や伊藤博文、同じく大磯に別荘をもつ腹心の原敬などがしきりに陸奥邸を訪問したことや、体調不良の陸奥に代わって大臣を務めた西園寺公望との交流が文献に書かれている。
- また、原敬は宗光死後も古河家と交流を持ち、古河潤吉は新会社設立の際に主宰者として原敬を迎えている。

池田成彬への訪問者

- 政財界要人だった池田のもとには、自宅謹慎中も多くの訪問があった。同じ大磯に住む吉田茂がしばしば、池田の家を訪れて政治の相談をしていたと文献に書かれている。
- 李王家の後に滄浪閣に住んだ樫橋渡とは、隣人として親しく自宅を行き来する間だった。
- その他にも、樫橋、吉田などが入っていた大磯の有名人でつくった八人会の交流などがあり、伊藤の時代以降も大磯が政財界の奥座敷の場になっていたことが伺える。

5. 明治記念大磯邸園における交流

●人物相関図（大磯在住で明治記念大磯邸園に関わりのあった人物）



※1「流れのまゝに：李方子自叙伝写真集」（1978）李方子・明恵会
 ※2「少年団研究17(4)」(1940) 大日本少年団聯盟【編】. 大日本少年団聯盟
 ※3「榎橋渡傳」（1982）榎橋渡伝編集委員会. 榎橋渡伝出版会
 ※4「榎山愛輔翁」（1955）グルー基金, パロクロフト奨学基金, 国際文化会館 編. 国際文化会館
 ※その他写真：NHKエンタープライズ「明治記念大磯邸園 明治150年記念公開資料」

伊藤と家族ぐるみの付き合い